

令和5年4・5月号(302号)
(皇紀2683年) 毎月1日発行

編集人 川畑賢一

新風

発行人 魚谷哲央
年間購読料 2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
<https://shimpu.jpn.org/>
otayori@shimpu.jpn.org

日本とアジアの連携こそが 未来を切り開く

拓殖大学教授
ペマ・ギヤルポ

アメリカ外交が一定の成果を挙げているアジア情勢

現在の東アジアの情勢を見るとき、まづ最初に指摘しておかなければならないのは、中国といふ独裁国家・侵略国家に対するアジア諸国の連携が進んでゐることだ。その一翼を担つてゐるのはやはりアメリカである。バイデン政権に対し日本の保守派の中には批判的な意見がしばしば見られるが、少なくとも、トランプ時代の孤立主義的な外交から、国際的な連携を重んじる方針に転換してゐることは一定評価すべきだらう。

この二月十五日、ハノイで、ベトナムのゲン・ドゥク・ハイ国会副議長はベトナムを



実務訪問中のアメリカのキャサリン・タイ通商代表と会見し、「ベトナムは常にアメリカを最も重要なパートナーの一つと見なしてゐる」と述べ、

立、主権、領土保全、政治体制の尊重を基礎にして二国間の包括的パートナーシップを深化させていきたいと語つた。これは中国の南シナ海に対する覇権主義に対抗するためでもあらう。ベトナムは確かに共産主義の一方独裁が続いてをり、国内に様々な問題はあるが、やはりインドシナ半島の大国である。ベトナムがアメリカとの関係を強化することの地政学的意味は大きい。

さらに大きいのは、アメリカがフィリピンとの関係をより強固にしたことである。二月三日、ロイド・オースティン米国防長官がフィリピンを訪問、フェルディナンド・マルコス・ジュニア大統領と面会し、フィリピンで新たに四カ所の軍事基地の使用権を両国協定により獲得した。これによつて、中国の南シナ海や台湾周辺での活動に対し一定の監視体制をとることができ

る。おそらくアメリカはフィリピンのルソン島に基地を置く可能性はあるが、これは台湾に極めて近い場所だ。もちろん中国はこの協定を「アメリカの行動は地域の緊張をエスカレートさせ、地域の平和と安定を損なふものだ」「アメリカは、その自己利益とゼロサムゲームの精神から、この地域における軍事態勢を強化し続け

てゐる」と非難してゐるが、逆に言へばそれだけ中国がアジア諸国のアメリカへの接近を意識してゐるといふことだ。そして忘れてならないのは、日韓関係が、保守的な韓国大統領の出現により良好な方向に進んでゐることである。日韓両国の間には、韓国側の不当な竹島占拠や、根拠なき反日史観に基づく歴史問題が存在することは事実だ。しかし、少なくとも北朝鮮や中国といふ危険な独裁国家と対峙するためには、日韓の連携は国益上両国にとつてプラスになるはずだ。本来、歴史問題は、日韓がシャトル外交を復活させた段階で、あとは歴史学者の手にゆだねるべきものであつて、政治や外交の具にしてはならない。

インド訪問で感じたこと

私はこの三月、インドを訪れ、インド国際センター(国際文化会館)にて、現代日本の政治状況や外交について講演をする機会を得た。そして、インドが高度経済成長の中、経済的にも、ま

た政治・外交面でも自信を持つてゐることを確認できた。そこには、かつて非同盟諸国のリーダーでもあつたインドの国際的価値を復興しようといふ意気込みすら感じられる。そして、インドは現在G20の議長国であり、日本は勿論G7の議長国だ。その意味からも、日本とインドが今後ともに連携することを求める世論が、インドでは盛り上がりつつある。

そして、現在インドでは、実は中国について研究、分析した著作や論文が多数発行されてゐる。そこでは、習近平政治についての研究などがかなり進んでをり、今後、インドがいかに中国に対峙していくかが強調されてゐる。そして、故安倍晋三首相とモディ首相との外交面での連携や、日印関係の重要性についても高く評価する論考がなされてをり、残念ながら日本にはほとんど紹介されてゐないが、インドの日本への期待をうかがはせる。安倍政治については様々な評価があらうが、少なくとも、「自由で開かれたインド太平洋構想」や、クアッド(日米豪印四カ国首脳会合)の枠組みを作り、自由、民主主義、法治の原則に沿つた外交・同盟構想を打ち出したこと、そして安保法制を制定して一定の集団的自衛権に道を開いたことは、インドでは極めて高い評価を受けてゐることと確かだ。

そして、これは大変印象的なことだつたが、インドの凱旋門にかつて置かれてゐたジョージ五世の銅像の台座上には、現在チャンドラ・ボースの銅像が建てられてをり、今後日本とインドがますます強固な関係を持つことの一つの象徴のやうに思へた。

アメリカは確かに中国に対峙するために重要な同盟国である。しかし、一方でアメリカは、それぞれの国の地域性や国民性、置かれてゐる状況を無視し、あまりにも一方的にアメリカンデモクラシーの制度や精神を押し付ける傾向がある。実際、クアッドについても、インドはアメリカやオーストラリア主導であれば加盟はためらつたが、日本がその主軸になることで参加を決定したのだ。日本とインドの連携は、何よりもアジアの団結のために必要なのだ。

中国における日本人拘束と、日本国内でも行はれてゐる中国の民族弾圧

大手製薬会社アステラス製薬に勤め、中国での駐在歴が二十年になる日本人社員が、「スパイ」として拘束される事件が起こつた。中国ではこれまでにも国内で日本人を拘束してをり、今回の男性で十七人目となる。いづれも、「反スパイ法」(二〇一四年制定)によるものであり、裁判は常に非公開で、逮捕された人間がどのやうな行為で罪に問はれたのかは全く明らかにされ

新風驟雨

しんぶうしゅう
▼WBCで栗山監督率ゐる侍ジャパンが全勝優勝を果した。世界中に驚嘆と感動の渦を巻き起こした。大谷翔平を始め侍の各選手の活躍は素晴らしい。自分自身は明治の日露戦争でバルチック艦隊と戦つた東郷平八郎率ゐる連合艦隊を想ひ起こした。同時に司馬遼太郎の「坂の上の雲」のドラマが蘇つた。▼参謀秋山真之が東郷に「良き指揮官とは？」と尋ねるシーンがあつた。東郷は「良き指揮官とは決断した事に責任を持ち命懸けで行動すること」と答へてゐる。▼大谷翔平の言動もまた侍であつた。常に勝ちを奢らず敗者への敬意を忘れない。正に武士道である。チーム全員が一人一人自分のやるべき仕事を自覚して奮ひ立つた。このチームジャパンは前回の敗戦を教訓にして今日まで練り上げ鍛へ上げてきた努力の結実である。▼我国は大東亜戦争敗戦以来八十年近く夢を見続けてゐる。夢はいつか必ず覚める。ロシアのプーチンも中共の習近平も都合のよい心地よき夢を追ひつけてゐる。▼我国の指揮官は与野党共に国の尊厳と国益を本心に考へて行動してゐるだらうか。惰眠の夢から覚めたら亡国の憂き目。これが現実とならぬやうに備へよ！ (孝)

本紙目次

- 一頁：日本とアジアの連携こそが未来を切り開く
- 二頁：新風ニュース他

(二面へ続く)